生の道程
―青春の断章―

府川　昭男

穏やかな日和だった。
昭和二十七年九月、昌三（しょうぞう）はビルの二階で融資部長の前の椅子に座っていた。面接試験の筈だった。
部長は、タバコを口に挟み煙りを出しながら、回ってきた書類に目を通して決済箱に放り込む。タバコが短くなると、別のタバコを取り出し、その火を移していた。
昌三の前後左右を、社員が慌ただしく動き回っている。目の前の上部に〝融資部〟と横書きの札がぶら下がっている。右の中空には〝整理課〟の札が掛かっていた。
やせ型の小柄に見える部長は、淡いブルーの眼鏡を昌三の履歴書に向けた。
「あなたが藤木昌三君ね。学校は近い。今は下宿しているのかな」
「はい、渋谷駅の近くで間借りしています」
「法学部か、それでは総務に手続きしてもらいましょう」
すぐに、「総務部人事課の山本です」と言って、髪を綺麗に整えた男が現れた。ではこれから入社手続きをしますから、一緒にどうぞ、と挨拶して先導してくれる。山本氏は、ややひ弱そうに見えたが、動きはスムースだった。
「外へ出ましょう」と言い、すぐ近くの橋の上に案内した。橋には殆ど人通りがない。
「はい、写真を撮ります、そう、その辺でいいでしょう」と、シャッターを二度切った。
どうやら正式入社のようだった。

アルバイトのつもりだったが、なぜか正社員の手続きが進められていた。
明日から出社するようにとのことだった。彼女、村上輝子が話しを付けて居たのかも知れない。輝子とは五年の付き合いになる。唇は合わせたが、それ以上の進展はない。
輝子との馴れ初めは、埼玉県寄居町に彼女一家が疎

開していて、教員をしている時、鄙には稀な美人に見えた彼女に昌三が手紙を送ったのが始めだった。後で聞いたことだったが、手紙を見て家族会議を開いたとのことだった。そして、誠実さが認められて昌三は彼女の疎開先に呼ばれたのだった。彼女の家族は三人で、父は亡くなっていて、母と姉の三人暮らしだ。この面接試験に合格した昌三は晴れて交際が許された。この時昌三はN大の予科一年生だった。東京の下高井戸に下宿していた昌三が夏季休暇が終わる頃、彼女一家は、三軒茶屋に転居していた。

昭和三十年七月には、純愛物語のように輝子は肺を病んで二か月程入院した。昌三は、一度面会に行ったが、その時は、もう大分恢復していて、退院は一週間後だということだった。従来伝染病として恐れられ、完治不能と喧伝されていた結核もパス（パラアミノ・サルチル酸）やストレプトマイシン等の新薬が発売されるようになり、以後、日本から肺病患者は皆無になったとまで言われるようになる。（実は皆無ではない）

昌三が入社した会社は、東京証券金融株式会社という。その会社は水道橋駅北口から徒歩十分ほどの所にあり、途中神田川を渡る。

昌三は貸付係の一員として勤務することになった。算盤を使うことになったが、小学校時代に習っただけで、加算乗除の計算が危うい。特に除は分からない。数字や利息計算に悩まされたが、女性の先輩が懇切丁寧に教えてくれたので助かった。この女性花房さんは、毎日係長の頭に何やら薬を塗り付けていた。まるで夫婦のようだ。

花房さんは、昌三に教える時、説明の始めや終りに「いいこと！」と言うのであるが、これが昌三には大変新鮮で上品に聞こえた。いかにも東京らしい。

他に二人の女性が座っていた。みんな昌三より三つか四つ年上に見えた。

ある日の昼食時、女性の一人が「あーあ、男に持てるには、どうしたらいいかなあ」などと言った。気楽な昌三が「男と女は文字どおり異性です。でも、だからこそ、求めあっています。容姿も大事ですが、少し控え目で、なおかつ理知的に見せたら、いいと思いますよ」と話した。「あら、藤木さんて、難しいことを言うのね」と事務指導の花房さんが声をだした。もう一人の女子が「ねえ、私はどうかしら」と言う。

「あなたは色白で十分色気があるから、スカート丈を一センチ短くしたらＯＫです、いいじゃないですか」。

「あら、嬉しい、藤木さん好き」などと言う。
花房さんは「私は、胸が寂しいので気になっているの」と言うので昌三は「それは、ウエストに、それとなく控え目に帯び紐状のものを締めると、いいでしょう」と答えた。後日、彼女は細い紐を腰に付けていた。

翌三月になり、安月給だったが、やっと洋服が買えた。
昌三は紺の上下に臙脂色を基調としたネクタイを締めて出社した。
学校の卒業式には参加しないで、卒業証書だけをもらっていたので、みんなに見せた。形式的に、みんなは、おめでとうと言ってくれる。女性達は、卒業証書よりも、様がわりした昌三の洋服姿に興味津々で、ネクタイが洋服にぴったり合っていると感嘆の声をあげてくれるのだった。満更でもない気分を味わいながら昌三は、この一張羅の服を毎日着ていくことになる。

この金融会社の業務は、いわゆる庶民金融で、ここ何年か隆盛を極めているとのことだった。仕事に慣れてくると、会社の不思議さや危うさのようなものが少しづつ分かってくる。同時に社員のことも見えてくる。

貸付係のある男が、総務課にいた美人を連れ出し、八王子方面に逃避行を試みた。が、彼女に逃げられ、両親にも反対、激怒され、男は悲嘆に暮れ、ついに自刃に及んだが、中途半端で終ったという。一度会社に顔を出したが、退社していった。
この三月には、いきなり貸付課長が入社してきた。昌三の大学の先輩だった。
また、月末には質屋の息子だと言う男が入社してきた。この大林は、時々役員室に呼ばれていた。どうやら、借金の担保として持ってくる客の貴金属類の鑑定・査定の参考人として立ち会っているようだ。
一週間後、示し合わせて藤木昌三は村山輝子に会った。会社の様子や仕事の事など、なんとなく不安定な会社の事について話題が尽きない感じになった。
「そう、何か変なのよ。時々専務さんが私のところへ金額のない領収書や、わけの分からない領収書を持ってきて、文房具として経理から出金手続きしてくれと言ってくるのよ。金額はあまり大きくは無いけれど、不正出金だから私、心が痛むわ」
「なるほどね、折角貴女に紹介してもらった会社だけど、小さな不正もさることながら経営そのものが法の網をくぐっているようで、ちょっと心配……」

「今のところ心配しても仕方ないけれど、ね」
「うん、すぐ、どうも出来ないけれど、僕の力の無さが、無念で申し訳ない」
「いやよ、しっかりしてね」　喫茶店内は少し賑やかになってきた。
「あなたが、欲しい。だけど駄目だよなあ」
「結婚するまでは、駄目よ」
外へ出ると、夕焼けが霞んでいるように見えた。

貸付課長からは、何度も酒に付き合わされた。いや、ご馳走になった。時々酔いつぶれて駅裏で、朝まで寝込んでいたりした。
昭和二十八年になり、会社は順調な経営状態に見えた。年一割りの利息が得られることから、昌三は下宿のお母さんから十万円を預かり会社に投資をした。
日曜日になると、昌三は日常が空しい時がすぎるようになった。鬱屈した心情を晴らそうと、新宿に行き、映画を見た。映画なら何でもよかった。一時的に情感があふれたとしても、タイトルも監督や訴える内容も、ほとんど覚えていない。それでよかったのだ。
下宿に戻ってみると、お母さんから、
「今日は、輝子さんが見えて、二時間位待っていましたよ」と聞かされた。部屋に入ると、小机の上に淡いピンクの小さい毛糸のショール様のものが乗っていた。思わず匂いを、そう、それを手に取り鼻に近付けた。ほんのり甘い香りがした。手紙をだそうと思ったが、出さなかった。

ある時、貸付課の新井課長から呼ばれた。奥羽支店へ挨拶の手紙を書けとの事だった。昌三は、始めは〝拝啓……と書いて、時候の挨拶、ご機嫌伺い、そして敬具〟で締めた。
課長に提出したが、駄目だと言われた。次は〝謹啓……敬具〟で届けた。すると、
「こちらは本社、相手は支社だ」と言われた。今度は〝前略……早々〟でだしたがこれも駄目だと言う。とうとう、力尽きて昌三は、
「もう書けません、教えて下さい」と頭を下げた。
すると、書き出しを「冠省」とし、結びを「忽忽」と直しただけだった。少し腹立たしかったが、顔には出さなかった。

九月、勤務して一年が経過した。新井課長から声をかけられた。思いがけない言葉が飛び出した。出張だ

と言う。
「詳しいことは、整理係長から聞くように」とのことだった。社命だという。
命令とはいえ、何のためなのか、具体的に何をすべきなのか昌三には不安だった。なぜなら仕事に未熟な者が、地方に行って何ができるのか、ということである。
翌日、整理課の大きめの机の前に四人が集合した。整理課から二名、貸付課から一名、総務課から一名だった。自己紹介が行われた。
黒ぶち眼鏡で髪を整えた男が話し始めた。僕は整理課長の正木です、経歴や趣味など後で発表するとして、皆さんから、一応自己紹介をお願いしましょう、と言った。
「総務課の山本です、入社三年になります。趣味は読書ぐらいです」
丸顔のほっそり男が「僕は整理課の鈴木です、この会社に入って、四年になります、スポーツが好きです」という。
昌三の番だ。硬い髪の毛をなぜながら、
「僕は、まだ一年生で、会社の事もよく分かりませんし、仕事も幼稚です。趣味は読書と散文を書いたりしています、酒がすきです。今回の出張は不安です」
分かりました、と正木課長が引き取った。
「当社は、一応順調に経営されている。が、実は貸し付け金の回収が芳しくない。と言うより悪いのだ。そこで社長命令で、都内ではなく地方支社、特に東北方面の支社に出張し、その回収と経営状態を監査するようにとのことだ。みなさんは選ばられたのだから私のもとで、十分その力を発揮してもらいたい。出発日は明後日の月曜日とし、集合場所は、朝九時この会社前とする」。正木課長は、中身は分かるが話し方は弱弱しい。
この頃、昌三は輝子と会う機会が少しづつ遠ざかりつつあった。何故だか分からない。昌三自身の自信の無さかもしれない。今彼女が何処に住んでいるのかさえ知らない。あの、糸を引くようなベーゼの感触も忘れかけていた。
東北地方への出張は、その期間は概ね二十日余日で、社長からは特別の指示は無かったという。昌三は、ここは率直に聞いて、正木整理課長に従えばいいと思った。
東北本線に乗り、一路岩手県の盛岡を目指した。と

は言っても正木課長に付いて行くだけの、言わば気楽な出張ではあった。盛岡駅からは徒歩十五分で旅館に着いた。それほど大きな旅館ではなかったが、新築間もない感じで柱など檜の香りがのこっていた。

五十搦みの夫婦と一人のお手伝いらしい若い女性が出迎えてくれる。

入浴後の食事には驚いた。さすがに酒は出なかったが、刺身、天麩羅、煮魚、根菜類の煮物、吸い物など結構豪奢な料理が出た。あの悲惨な戦争が終わって八年、食べ物には、悲しくも苦しい、そう、ひもじい時代を乗り越えてきて、こんなにも平和な時代が，旨い物を口に入れることができるとは……感謝、いや当たり前なのかも知れない。

下宿の自炊では、一汁一菜ならず、一水一菜、つまり一杯の水と煮魚一尾である。時には、肉の細切れにネギを放り込み鋤焼風にすればご馳走である。

同宿者を横目で見れば、大して驚いている様子はない。不思議だ。

翌朝は、生卵、納豆、焼き海苔、焼き魚等、これまた豪勢な食事だった。

この日は、奥羽支社からの車が迎えに来て四人が乗った。

支社は、ビルの一、二階が事務所になっていた。支社長の事業説明や組織を聞いた。

本社の社員は、それぞれ担当部所の事業内容を調べることになった。昌三（しょうぞう）は融資関係の事しか分からないから、紹介された融資担当の女性から帳簿類を見せてもらう。

彼女は、まだ二十歳過ぎの可愛らしい女の子という感じだった。

融資申込者からの入金状況（三か月間）、それに対する貸し金状態を調べる。

例えば、ある個人が一万円を三か月間、定期的に会社に入金すれば、審査の結果、三倍の九万円が借りられる。六か月間据え置き後、返済が始まる。月利二分で、毎月の返済額は一万二千円になる。遅滞すれば延滞金が発生する。

金額が五万円以上になれば、稟議書による審査が行われる。その内容は動産、不動産の所有の有無、債権・債物や人柄等にも及ぶ。担保は株券等が多い。これは本社扱いになる。連帯保証人も付けるが、支払い能力があるか、どうかは実際は分からない。つまらぬ性善説は通用するのか、怪しい。

融資担当の女性は赤い頬を染めて、畑中です、と改

めて自己紹介した。彼女は予め融資関係書類を用意して昌三の机の前に並べた。おもむろに、その書類の山に目を通す。中身には間違いはなく、扱いが丁寧で、几帳面であることが分かる。
休憩して、茶をのみながら雑談する。家族は父母と姉弟の五人暮らしという。勤めは楽しいか聞いてみると、楽しいですと言いながら、でも色々な人とあうので時には嫌になることが有るという。それは直ぐ怒る人だそうだ。
「まあ、色々な人がいるから、世の中は面白いし、刺激を受けて勉強になる、などと言ったら生意気かな」などと言ってみる。
「その通りだと思います」彼女は素直だ。
「ところで、この帳票の五郎と帳簿の伍郎は違っていない？」
畑中さんはあわてて、
「あっ、そうです、間違い、この人なんです、なんで毎月利息が上がるんだと、怒った人です」と言う。
昼食になり、卵丼が出た。四人が集合した。食事中、正木整理課長が、
「なにか問題点は有りましたか？」と三人に声をかけた。
整理課の一人が、
「課長と一緒に調べていますが、どうも社員の熱意が感じられません。午後調べます。返済状態がまずい」
あれこれしている内に、夕刻になり、本社員は四時に仕事を終了した。支社の車で例の旅館に着き、入浴、食事となる。昨晩と同じような言わば贅沢なご馳走がでた。
正木課長だけは、後ほどと言って、調査結果らしいものを書いていた。そして、昌三が一服している間に、皆居なくなった。どうやら、そろって一杯飲みに行っているようだ。昌三は新聞を読んで時間をつぶした。
こうして、金曜日まで同じような食事をし、同じように奥羽支店に通った。
金曜日の旅館の食事時だった。
「毎日同じようなご馳走で、もう飽きた。何か他の物を考えてくれないかなあ」
総務課の山本さんが言い出した。この主人を責めているようにも聞こえた。
「はい、なにかご希望がありましたら遠慮なく申付けてください」と主人は答えた。
「そうだなあ、お茶漬けが食べたいなあ」、山本さんは、澄ましたし顔で言った。

「おやすい事です。明朝の食事は、お粥、夜はお茶漬けで如何でしょう」
「ああ、上等、それがいい」と、山本さんは課長を無視して返事をしている。
この旅館に止宿して六日が経過した。翌日の日曜日、宿の主人が果物園を案内すると言う。
車で三十分走っただろうか、大きな果樹園に着いた。北方に見えるのは岩木山であろうか。色々な種類の果樹があった。リンゴを皮付きのまま食べる。旨い。次は生まれて初めて洋梨を食した。なんとも珍しい甘さと食感。少し物足らない感じ。葡萄を食べ、メロンや普通の梨等たらふく食べた。宿の主人は満足そうだった。
宿に帰り、食事の後、例により皆居なくなった。十時過ぎ、若い女の子が山本さんが居なくなっちゃったと言いながら、少しふらついて入って来た。酔っている。
「どうしたの」と聞くと、
「私は山本さんが好きなの、でも居なくなっちゃった、ここに帰っていない？」
まだ若い丸ぽちゃの子は、昌三にキスして、泣きだした。昌三は抱き締めてあげた。遊びであろうが、かわいそうでもあり、罪作りなことだ。
次に向かったのは、青森県の八戸支社で、ここは三日間の調査をした。とくに問題はなかった。最後の日の夜、小料理屋の二階で小宴会が開かれた。飲むほどに、皆元気になり、小太りの支店長が徳利（とっくり）を股間に持ち、上下させ八戸小唄に合わせて部屋中を歩き回った。それが面白く全員が爆笑した。
次は秋田支店、ここは市内の目抜き通りに位置し、一二階を事務所として使っていた。貸付係の女性は、昌三と同じ位の背丈で、秋田美人とはいかなくても、まあ、普通で真面目だった。ここの支店には六日程通った。
他の同行社員は、どんなふうに調査をしているのか気にはなったが、知る必要は無いと、勝手に考えた。正木課長からも、何の指示もない。決められた貸付け業務の仕事をしていれば、普通には間違いは起こらない筈だ。むしろ、この庶民金融業務の方が仕組みとして、問題があるのではないか、気になる。
海が近いというので、昼食時間に貸付担当から海辺へ誘われた。柔らかな潮風に吹かれながら、彼女は昌三の東京の生活ぶりなど、それとなく聞いてきた。あ

る種、羨望のまなざしが見えた。
翌日、昌三は一人、町並みを散策した。
丁度、薬局が目に入った。中に入り声をかけた。買い物をすると、一つお負けだと言って、薄い袋を付け加えた。買ったものは一ダースのコンドーム。店の上品な婦人は年の功か、ニコッと笑みを浮かべて「お楽しみ下さい」と付言した。
ここ秋田の旅館は二階建てで、一階の唐紙障子を取っ払うと五十畳はあろうかと思われる老舗(しにせ)旅館だった。ここには女中が十人程働いていた。三日目当たりになると、少し慣れてきて、彼女たちと会話するようになって来る。ある日の夕方、昌三は一番綺麗と思われる一人を呼んで、手相を見てあげると言ってみた。そこは、ある部屋の片隅である。彼女は顔をやや赤らめ、喜んだ。
昌三は一度、渋谷の横丁で占いの大道易者に手相を見てもらったことがある。それは手はもとより顔も良く見る。まず褒める。育ちが良いと、なんとなく、こちらの気分を高揚させるような事を言う。そして、後の詳しいことは別室で、あなたの悩みや行く道などを解決して差し上げます。こちらは有料ですと言う。昌三は、これで結構ですと、礼を言い、ここを去ったことがある。
手相は、年度別の〝家庭暦〟記載の高島易断で勉強した。勉強といっても、何回か読んだだけである。
手相の主な線は、生命線、頭脳線、感情線(三大線)、外に運命線、太陽線、健康線、結婚線等がある。例えば生命線は、健康運や生命の長短を見る。また頭脳線は性格を、感情線は愛情生活を見る。結婚線は異性からの愛情または結婚の変化を見る。
なお手筋の外に、その形状や厚薄も見る。手の小さい人は放縦であるが大きい目的をもっているし、手の大きい人は細心で手先が器用である、などと見る。
昌三は、以上のような浅薄(せんぱく)な知識のもとで手相を見ようというのだから、少しく冒険であるとは思う。古来、八卦(占い)は当たり外れの見本見たいに言われてきた。
昌三は、徐(おもむろ)に女性の手を取った。薄くて大きめである。
「あなたは、こまやかな心を持っていて、手先が器用ですね」
相手は、自分のことを褒めてくれるのを待っている。
「えっ、そうかもしれません」素直な子である。

「顔が、そう言っています」
「あらあ！」
昌三は、彼女の手を握って見る。触ってみたいだけである。柔らかくて暖かい。
「とても親切で、思いやりのある手相です」
相手の顔色や、目の動き、動作を会話の中で見いだす。
「長生きします。そう、八十歳でしょうか」。本人は驚く。
「今まで、ちょっと病気をしました。これから、二度ほど病気をしますが、軽い」
ちょっと心配させ、相手の心の動きを見る。
「あなたは頭が良いのに、それを誇示しないところが素晴らしい」
「そうではないと思っています」
「この一年間の間に、いい人が見つかりそうです、結婚は三年後かな？」
「嬉しい……でも、東京へ行きたい」
「強く望めば可能でしょう、ですが余り勧めません」
「どうしてですか？」
「生き馬の目を抜くと言う言葉があるでしょう、純情なあなたは、そんな事を考えなくても大丈夫。十分お金は溜まります。江戸は危ない」
「でも、悔しいなあ……、夢なんです」
「僕についてくるかい？」
「付いて行きます」、真剣な顔付きになる
「冗談、冗談、僕はお金持ちにはなれないから、駄目、残念です」
半分は遊んだつもりだったが、この手相を見たのが評判になり、五人の手相をみることになった。人の手相を見るという事は、人間を見ることであるから、非常に疲れる。頭を使う作業になるものだ。「申し訳ない、疲れて来たから勘弁してくれ」と、次の人から手相見はやめた。
ただ、それから浴衣掛けの法被の袂（たもと）に、言わば恋文のような折手紙を、通りすがりに放り込まれた。三人からの幼稚な紙片だった。みんな上げます、などと書いてあった。しかし、昌三にもプライドが有ったから、簡単に彼女達を抱くようなことはできなかった。以前買ったコンドームは使われる事なく、旅行鞄の底に入れたまま眠っている筈である。
同じ秋田県の大曲に行った。横手盆地の商業中心地というが、小さな町のようだ。
この支店は、小さな事業所を構えていて、六人が働

いていた。とくに問題は無いようだった。次はまた岩手県の南東部にある遠野支店を目指した。未舗装の道路を外車で走り、時々ボディーの腹が地面をガァ、ガァとこすって行った。外車を見るのも乗るのも初めてだった。この支店も貸付に瑕疵(かし)は認められなかった。なお、ここが柳田国男の「遠野物語」の地であることは、全く知らなかった。

最後に福島支店には、一泊して、調査した。中年の支店長は、人柄の良い腰の低い人物に見えた。

こうして、二十日の出張は終わった。昌三は下宿のお母さんには、出張が終了したことを告げ、御土産を渡した。

翌日、会社に行き、出張報告を書き、課長に提出した。その報告書には何を書けば良いのか苦心した。事務処理には特段の問題はないが、全体的に熱意が無いのが問題だ、と苦し紛れに問題提起をした。これを読んだのかどうか、荒井課長は「ご苦労さん」と、言っただけで、後は何も言わなかった。

出張前に、事務所の左側・神田川の水面に何本もの太い松の木が打ち込まれていたが、これは、どうやら新事務所の土台作りのようだった。そして、今見るとコンクリートの杵作りが始まっていた。会社経営は順調に推移しているようだ。

昌三も仕事に慣れ、ただ昼食はいつもの狐うどんであったが、心の余裕のようなものが生まれていた。質屋の息子・大林と近くの広場でキャッチ・ボールをする余裕もできた。

気になっているのは、村山輝子のことだった。

恋も、五年以上も過ぎると、倦むときがある。同時に、自らの経済的自立も自ずから自覚せざるを得ない。

会社終業後、昌三は輝子と一緒に、いつもとは逆の方向に歩き出した。

「何か久し振りという感じだよね」

「昌三さんは、この頃少しも声をかけてくれないんですもの、忘れたのかしら?」

「いや、いや、とんでもない、少し忙しかっただけ」

「そうかしら、私にも少しは分かっていましてよ」

夕刻、茜雲が二三本の葉の無い木の上に、なびいていた。

輝子は、母と姉二人で、相続人に決まっていた。昌三と輝子が激しく唇を合わせたのは、二番目の姉の新築の家だった。この姉の夫は警察官である。土地は広く八十坪は有ろう。昌三には、当分そんな力は無い。

〝ゆく河の流れは絶えずして〟と方丈記は始まるが、人生は止まること無く、変転をして行くものだと思う。情を絶ち、一度原点に立ち帰るのも、僕たちが生き返る一つの手段だと思う。僕たちでは無く、僕の考えです。このような訳の分からないことを言って、昌三は一つの別れを、優しく切なく輝子に伝えようとした。しかし、声を出してみると、

「貴女を嫌いになりそうな気分になっているようです」と言っていた。

すぐさま、返ってきた言葉は、

「なによ、嫌いと言いなさいよ、男らしく無いわね！」だった。

そして、丁度そこは町並みが途切れ、人も無く目の前は真っ暗闇だったのだ。

輝子は、その闇の中へ、走るが如く、すっと消えた。

昌三は、あっと一瞬、気持ちが動転したが、その闇の中に走りこんだ。しかし、暗闇の中には何も見えなかった。うなだれて、すごすごと帰路に付くしかない。

これで終わりだと自らに言い聞かせたが、後悔は消えなかった。でも、仕方が無い。

荷を降ろしたことと、これからは自由奔放でいいのだと、苦し紛れに思考した。

「まあ、なんだよ、そんなことにくよくよしたって仕様がないよ。割りきっちゃうんだな。貞操を守るとか純愛なんていうことは、もう古いよ。それで、今日は藤木君の知らない世界へ案内するよ、気分もすっきりするぜ」と質屋の大林は言うのだった。

品川に着いた。小さな飲み屋で濁り酒を飲んだ。口当たりがいいので、つい余計に飲む。

「さあ、行くか」大林は言う。

「どこへ」、想像はつくが、一応聞いてみる。

「遊郭さ」

藤木昌三は少し迷った。でも、遊びも人生だ！、誘惑に負けるのも勇気、負けないのも勇気、儘よ……、とばかり大林の後に着いて行った。

大林は手馴れた口調で相手と交渉し、「お前さんは、この子、僕はこの女にする」

「うまくやれよ」、と大林は言って奥の部屋に消えて行った。

昌三は「こちらへどうぞ」と言う女の後に着いて行った。部屋には、ほんのりしたピンクの明りがついていて、強い香水の香りが花を刺激する。

女は素早く和服を脱ぎ、下着だけで布団に入った。

「なにしてんの、早く用意してよ！」
言われて、昌三も服を脱ぎ布団に入る。
「元気がいいわね」と言いながら、するりとゴムを着けた。そして、早々に跨がって来たのだった。

昭和二十八年、朝鮮戦争特需の反動不況は深刻化していたが、生活物質は豊富になってきていた。三月には吉田首相のバカヤロウ解散があり、五月にＮＨＫ、初の大相撲のテレビ中継、七月には伊東絹子がミスユニバース三位入賞、七月に朝鮮休戦協定調印となる。
そしてこの年、二十八年十月二十四日、高利をエサに集めた保全経済会が営業不振、破産した為十五万人の大衆投資家が大被害を被ったと報道された。この年の流行語はサイザンス、八頭身。映画は君の名は、東京物語、ライムライト。銭湯が十五円、テレビは十七万円もした。また、斉藤茂吉（７０）、堀辰雄（４８）、坂東妻三郎（５１）らが亡くなっている。
さて、今勤務している、この東京証券金融（株）も保全経済会と同様に庶民金融を経営している。先行きが気遣われる。

十一月中頃の三時休憩の時、二階の社員が急に居なくなった。みんに一緒に行ったような気配がした。何にも聞いていない昌三も、一階に降りてみた。隙間もないほど人が集まっていた。昌三は後ろの方に居たので、良くは聞き取れなかったが、どうやら労働組合を作ろうという事らしかった。そんなことなら、先に根回しして社員の気持ちを一つにして置けば良いのにと、昌三は思ったものだ。それが証拠に、すぐさま経理部長が反対演説を始めたのである。いつも威張っている此部長の言っている話しも良くわからない。元手が無いから、組合を作って賃上げを要求されても無理だということらしい。
その後、この労組の話しは出ず、店晒し状態のまま放置された。
年末、賞与も出ず、平平凡凡として、無難に年が暮れていった。
年が変わり、新しい良い年が来たように思われた。ただ整理課は特に忙しいようだ。地方の貸し金の回収状況も儘ならないのに、東京はもっと悪かった。整理課の社員は、忙しそうに出たり入ったりしていたが、回収金は戻ってきていないようだ。そのための手段が間違っているのか、貸付先を隈無く回っているのか、など其の動静には、いささかの熱意が感じられない。

役職にある者も、部下に特段の指示はしていないようだ。一方で隣のビル建設は少しづつではあったが、進捗していた。昌三がちょっと覗いて見ると、むき出しのコンクリ壁に木の棚があり、そこに白紙や印刷物が乗せられていて、じっとりと濡れていた。これは駄目だと思った。

ある日曜日の翌日、いつものように会社に出勤した。なんとなく変だ。十人程の人が、それも知らない人ばかりが動き回っていた。ある男は朝から酔っていた。

保全経済会の事件が頭をよぎる。ああ、倒産するのだと思った。

昌三は、ここで下宿のお母さんから預かった十万円のことを、危うく忘れそうであることに気がついた。

また、この会社の倒産についてはマス・メディアも知悉していないであろうことは、おおよそ見当がついている。一階には整理屋のような人が三人いたが、二階には誰もいない。昌三は、整理課の帳簿と伝票を探し出し、十万円の貸し付け先の人物を探し出そうと真剣に努力した。有った。救われたと思った。

その貸し付け先は、御茶の水駅の北口側に有ることが、地図の上で分かった。昌三は早速尋ねることにした。駅から十分程の所に、切妻門に[鮫島]と書かれた家があった。声をかけると、日曜日のせいか中年の紳士が現れた。

「早速ですが、私は東京証券の中沢です。立派なお住まいではありませんか。最近ではこんな立派な門のある家は見たことが有りません」

「いやいや、それ程のことは有りません、融資金のことですね？」

「はい、そうです。今月は特別回収月間になっておりまして、私どもが引っ張り出されている次第です。十万円ですから本来は相当の利子になりますが、特別月間ですので、利子は二千円ということで、お願いに参りました」

「ああ、そうですか」

「次の日曜日に、再度お伺いしますから、ご用意して頂けませんか？、そう、午前の十時ごろ、参りたいと思っています」

昌三は、整理課の引き出しから、勝手に〝中沢〟という名詞と判子を用意していた。

「失礼ですが、念のためと言うより仕来(しきた)りですので、この名詞の裏に[返済ＯＫ、鮫島様の氏名・印]をお願いします」と伝えた。

紳士だから間違いは無いと思ったが、本人の頭に〝返済〟の文字を植え付けて置きたかったのだ。
約束の日曜日に、昌三は中沢になって鮫島邸に行った。前回は薄曇りの天候だったが、今日は、晴れて、小春日和かと思わせる陽気だ。
声を掛けると、例の紳士が現われた。心なしか、明るい顔色に見える。
「今日は、約束の日ですから、お伺いしました」
「分かっております。用意できました。ここに十万円と二千円有ります。お受け取り下さい」、そこには、銀行の帯封付きの札束一つと二千円の金額が置かれていた。
昌三は、恭(うやうや)しく、その金子(きんす)を受け取り、〝中沢〟の氏名・印の領収書を鮫島氏に手渡した。
下宿に帰った昌三は、早速お母さんに会って、事の顛末を説明した。
「ごめんなさい、実は会社は倒産してしまいました。お預かりしたお金ですが、高い利息が付くからと言って投資したのですが、二千円しか利息が付きませんでした。申し訳ありません」と言って昌三は頭をさげたのだった。
その後、昌三は残務整理が有りますので、暫くこの会社に通勤します、と言って、それからも、しばらく、この会社に通勤した。何となく居心地が良かったのと、当面外(ほか)に行くところが無かったせいである。その間、鮫島氏の入金については、整理課の帳票類を整理して正規入金のように装うことにした。
なぜか、若い女性一人と昌三を含め男四人が不思議と馬が合うのだった。昼食など、近くのパン屋でカツサンド様のパンを買い、彼女が茶を入れてくれる。その他諸々四方山話に花が咲くという訳であった。屈託無さが楽しかった。
一か月経ち、近くの飲み屋で酒を飲み、「この辺で区切りを付けよう」と誰ともなく話が出て、解散することになった。
会社の倒産は、昭和二十九年一月二十九日だった。
昌三の運命は尽きることは無い筈だけれど、まさに道に迷っている。